研究論文

鳴門教育大学情報教育ジャーナル No.15 (1) pp.25-30 2017

# 歩き遍路体験を主題とする俳句の創作と学びの質との関係
## ー学部授業「阿波学」における取り組みをとおしてー

皆川直凡*

歩き遍路を体験した学生は，自らの感動を俳句で表現した。体験者は，事前授業時と，歩き遍路体験後の 2 回，歩き遍路をとおした学びに関する 7 項目から成る 5 段階評定の質問紙に回答した。本研究では，歩き遍路を体験した学生による創作俳句が季語を中心にどのように構成されているかを分析することを試みた。その結果，歩き遍路を体験することに加え，その感動を俳句によって表現するという課題にとり組むことにより，自然との交流，文化の探究，地域住民との交流，状況対応，同行者との協力，自己洞察といった態度や傾向が高まるようすがうかがわれ，歩き遍路という体験を俳句という表現形式によって印象づけるという取り組みによって，学びの質が深まることが示唆された。一方，共感・他者理解の側面は，必ずしも向上せず，課題を残していることも確認された。

［**キーワード**：俳句，歩き遍路，アクティブ・ラーニング，新学習指導要領］

## 1. はじめに

歩き遍路体験は途上の自然，文化，そして人間との交流から自己や他者との関係を見つめ直す好機であり，体験の意義は心に刻み込んだり省みたりすることにより深まると考えられる。日本人は，体験を心に刻み込む手段として俳句という短詩型を創造し，遍路の途上でも数々の俳句が詠まれてきた。

筆者は，こうした理解に基づき，本学の大学院ならびに学部における，歩き遍路を主体とする体験型の授業(事前授業 5 コマ，オリエンテーション 1 コマ，および宿泊を伴う歩き遍路実習から成る)において，その途上で出会う風物や，同行者や地域の人々とのふれあいをテーマとして俳句を作ることを提案し，実践してきた。

筆者は，5 コマの事前授業のうち 1 コマを担当し，上で述べたような，俳句の機能とその構造(十七音，季語)，および遍路との親和性について解説し，創作法(皆川，2005)を教授し，歩き遍路での俳句の創作を奨励してきた。この教育プログラムは，学部では 2008 年度より授業科目「阿波学」の中で，大学院では 2007 年度より授業科目「四国遍路と地域文化」の中で，2017 年度現在，継続して実施しており，2015 年度までは，俳句の提出を義務づけていた。

本研究は，歩き遍路に参加した学生が創作した俳句と，作者の心情との関係を分析し，歩き遍路体験の教育効果を検証することを目的として行われた。そのため，まず，歩き遍路体験をもとに俳句を創作する教育プログラムの概要を記述する。

## 2. 教育プログラム

筆者が担当する事前授業は，「心理学から見た四国遍路ー俳句で綴る遍路の心ー」という標題で実施し，まず，シラバスにもとづき，授業全体の目的及び主旨・到達目標について述べる。以下に，要約する。「四国の文化アイデンティティたる遍路の体験的・実践的学習により，地域理解の深化，その文化や伝統に目を向ける態度を養う。まず，講義により，遍路に関する基礎理解を形成する。つぎに，実際に遍路道を歩く歩き遍路実習により，地域の文化や自然，遍路を支える人々の活動，自治体の取り組みなどを直接知り，地域の人々の営みの現状や課題を考察する。歩いた体験をもとに，俳句を創作する。教育や学校にたずさわろうとする者にとっての，地域文化を理解・尊重する基盤的態度・視座を形成することを到達目標とする。」

つづいて，「本授業科目の心理学的観点ー遍路体験の心理学的意義ー」について，下記の通り説明する。「社会的存在である人間のこころ(知・情・意)の科学的理解を目指す心理学の観点から，歩き遍路体験は，途上の自然や文化，そして人間(同行者，地域住民)との交流から，自己を見つめ直す好機と考えられる。先行研究では主として，感情や意欲の変化が検討されてきたが，ここでは，認知の変化にも着目する。歩き遍路と俳句の創作をとおして，自己の

* 鳴門教育大学 大学院 基礎・臨床系教育部

とらえ方がどのように変化するかについて探究する。」

つづいて，３項目から成る。授業を行う。「体験を深める手段としての俳句－俳句の魅力と心理学的意義－」，「歩き遍路と俳句の親和性－心理学の観点からみた，歩き遍路と俳句－」，そして「歩き遍路における俳句の創作について」の 3 項目である。以下に，各項目の授業の内容を講義ノートから抜粋して示すとともに，理論的背景について論述する。

### 2.1 体験を深める手段としての「俳句」
### －俳句の魅力と心理学的意義－

まず下記のとおり，体験の意義を深める手段として生まれ，世界に向けて発信してきた俳句に注目させる。「本授業科目における学びには，遍路道を歩くという現地体験が含まれる。体験の意義は，心に刻み込んだり思い返したりすることにより，いっそう深まる。日本人は，自然，文化，そして人間との交流を心に刻み込む手段として，俳句という短詩型を創造し，世界に向けて発信してきた。」

つぎに，「俳句の成り立ち」について，下記のとおり解説する。「俳句は有季定型によって成り立っている。有季定型とは，十七音によって構成し，季語を必須とする詩型である。俳句の魅力，つまりその面白さや豊かさは，この有季定型によって醸成される。俳句は，極小サイズの短詩型であり，何枚もの原稿用紙を費やしても語りつくせないような体験・感動をわずか十七音に集約する。正に，究極の要約作業であるといえる。」

俳句の特徴への理解を促すために，つぎに言及するのは，季語と呼ばれる構成要素である。「俳句は，この世で出会うものから感じとった心を，人間の感性と知性で選び抜いた季語に託して表現することによって生まれる。俳句の楽しさ・素晴らしさは，季語との出会いから生まれる。季語とは，先人たちが生活の中から紡ぎ上げてきた，季節を表す言葉である。ひとつの季語の背景には無数の知識が存在する。このような知識を心理学では意味記憶(Tulving, 1985)という。様々な出会いの瞬間を心に受けとめて季語に託して詠む，それが俳句である。人，季節，行事，植物，動物など，私たちは，毎日数えきれないものと出会っている。こうした生き生きとした出会いを季語と結び合わせて表現する，それが俳句である。俳句を作ることは，季語をよく知ることである。」

つづいて，コミュニケーション・メディアとしての俳句の特徴について述べ，俳句が人間の心を探究する心理学の重要な研究材料であることを明らかにする。「俳句は，その創作だけにとどまらない。俳句を媒体として，人と人とのコミュニケーションが生み出される。万葉の時代から，日本人が受け継いできた五七調あるいは七五調のリズムは，今日でも，老若男女が熱中している。俳句は，諸外国でも，HAIKU として親しまれている。俳句は，作り手と読み手の心をつなぎ，自分自身との対話をももたらす，究極のコミュニケーション・メディアである。コミュニケーションは，心理学の主要なテーマのひとつである。したがって，俳句は，心理学の重要な研究材料である。」

つぎに，「定型という器に盛る工夫を楽しむ」ことについて述べ，表現形式としての俳句について考えさせる。「型が決まっていると，窮屈で個性が発揮できないと思うかもしれないが，その供し方に個性がはっきりと表現される。俳句は，定型という共通の器に，一人一人の心(感動，発見)を盛る。この俳句を複数の人々が詠み合う(読み合う)ことで交流し，互いの心を発見できるコミュニケーション機能をもつ。原則として十七音で構成し，五音，七音，五音の組み合わせの音律を基調とする精神安定機能をもつ。十七音の韻文詩形式は，日本語のしらべとしてとても自然で，すうっと心にしみこんでくる，安定と変化を兼ね備えた完璧な詩型である。極めてシンプルでありながら，集約，余韻といった独自の効果を生み出す。」

つづいて，「季語の宝庫・自然の観察から始める」ことが俳句の第一歩であることについて，「花鳥風月」という言葉を用いて解説する。「花鳥風月という言葉がある。これは，日本人が自然の美しさを賛美してきた言葉である。たとえば，単に「月」といえば，秋の季語になる。他の季節に「月」を詠むときは季節名を付けるが，春の「朧月」，夏の「月涼し」，冬の「寒月」など季節名を付けずにその季節を表すのも，風情のある季語である。一方，単に「遍路」といえば，春の季語となる。古くは三月から五月上旬に霊場を巡拝し煩悩の消滅を祈願したことに由来する。遍路は秋にも多いことから，「秋遍路」という語も季語として定着してきた。生活の中で生きた季語を体験し，味わいながら，自分の感性と知性で一行の詩にしていく，一つ一つの出会いから生まれるこころの揺らぎを率直な言葉で詠んでいく，これが俳句の基本である。俳句のある生活は，どんな小さいものにも歩み寄る瑞々しい心と共にある暮らしである。この特性は，共感と思いやりのこころにつながる。先人が伝えてきた季語の背景には，人々が共有する無数の知識(心理学用語では，意味記憶)が存在する。俳句の創作をとおして，見るもの，

聞くもの，味わうものなどすべてにわたる好奇心が高揚し，感情の活性化がなされる。このように，俳句の創作過程の説明に，ちりばめられた心理学用語(共感，思いやり，意味記憶，好奇心など)から，心理学の研究対象としての俳句の特徴が浮かび上がってくる。」

つぎに，上記の論述をふまえ，「俳句創作のすすめ」を行う。「自らが体験する出会いを季語と結び合わせることによって俳句が生まれる。俳句は古いものだという声も聞かれるが，若い人はフレッシュな感性で率直に詠むことができ，人生経験を積んだ人には深い味わいがにじみ出てくるというように，それぞれの良さが自然に現れてくる。万人に共通するのは，誰が詠むにしても，その根本に季語があるということである。自分自身の心のかたちを，俳句という五七五の十七音に書き換えていく楽しさを味わってみることをすすめる。」

### 2.2 歩き遍路と俳句の親和性
### ー心理学の観点からみた，歩き遍路と俳句ー

遍路の歴史がはじまるとともに，その途上において，数々の俳句が詠まれてきた。現代においても，各札所の境内にもお遍路さんの俳句が掲示されている。途上にも，たくさんの句碑を集めた場所があり，「俳句の小径」とよばれている。本学において歩き遍路を取り入れた授業は2006年に開設されたが，俳句を創作する試みはその 2 年目から導入された。その試みは，2016年度まで10年間続けられ，その鑑賞をとおして心理学的効果が検証されてきた(皆川，2011；皆川・佐々木，2014)。

つぎに，本授業でおこなってきた歩き遍路体験にもとづく俳句創作の取り組みについて紹介する。「年度によって，また個人によって，さまざまな俳句へのかかわり方がなされてきた。俳句を作った時の思いを綴ってくれた作者もいる。無記名で俳句を詠み合い，感想文を書き合った年もあった。中には，友だちと協力して絵や写真とコラボレーションさせた作品をつくった人もいる。創作された俳句は，下記の二つの観点によって，分類された(皆川，2011；皆川，2014)。第一に，詠み込まれた対象が，自然(時候・天気，天文・地理，動物・植物など)，人間(自己，仲間や地域の人々など)，文化(生活・行事，寺院，史跡など)の 3 つに区分された。第二に，作者の心の在り方(気持ち，感情，考え，意図)が，自己対応(洞察・実行・制御)，対人対応(共感・協力・感謝)状況対応(洞察・対処・危機管理)の 3 つに区分された。

つづいて，過年度の本授業で創作された俳句の中からいくつかの作品をパワーポイントで紹介し，鑑賞することを求める。本論文では割愛するが，実際の授業では，15 句程度を紹介し，心に響いた作品を書き留め，感想文を書くことを求める。そして，以下のように授業を続け，俳句創作への機運を高めてゆく。

### 2.3 歩き遍路における俳句の創作について

「ここでは，ほんの一部を例示したにすぎないが，このほかの作品からも，それぞれの感性で歩き遍路体験をとらえ，自分のものとして表現している様子を伺い知ることができてきたと思う。そこで今年度も，歩き遍路の途上で出会う風物や，同行者や地域の人々とのふれあいをテーマとして俳句を作ることを提案する。」

そして，俳句という短詩型は「詠む」(つくる)だけではなく，「読む」(相互鑑賞する)ことで，いっそう深まるという論を展開する。そのうえで，下記のように述べ，俳句の創作を奨励する。「そこで，本授業では，みんなで俳句を読み合う機会を設けたいと考えている。遍路の途上では，さまざまな風物に出会う。食事の時には，旬の食材にも出会う。また，地域の人々との交流や，文化や歴史について知る機会もある。その一つ一つが季語なのである。歩き遍路は俳句をつくる絶好の機会であるといえる。この機会に，自分自身の心のかたちを，俳句という五七五の十七音に書き換えていく楽しさを味わってみよう。感じたままに俳句にしてみよう。今から簡単な創作方法を紹介するが，それにとらわれる必要はない。自由に作ればよい。提出方法などの詳細は，歩き遍路の 3 日間のうちに知らせる。」

本授業でおこなっている俳句の創作方法の説明を図 1 に示す。俳句に詠みたい五文字の季語を見つけ，季語とは直接の意味的関係はないがイメージではつ

**俳句創作法入門**

《前提》俳句は十七文字で，季語が入っていればよい。
俳句の基本のリズムは，五／七・五　もしくは 五・七／五　である。
①俳句に詠みたい季語を見つける。
五文字の季語が扱いやすい。
「や」「かな」等と合わせて五文字にすることもできる。
②季語とは直接関係はないが，イメージの近い十二文字の文を作る。
五文字＋七文字＝十二文字⇒下に，「季語(＋α)」
七文字＋五文字＝十二文字⇒上に，「季語(＋α)」
③季語と十二文字の文を合体させる。
【十二文字の文＋五文字の季語】
例）ゆずりあう心それぞれさくらんぼ　星子(せいし)
【五文字の季語＋十二文字の文】
例）星涼しこの道急ぐこともなく　星子(せいし)
☆練習のために，ここで紹介した創作方法を参考に，俳句をいくつか(最低1句)つくってみましょう。配付している用紙に記入し，提出してください。

図 1 俳句創作法の説明に用いた図式

ながっている十二文字の文と合体させることで表現に広がりをもたせる方法である。夏井(2000)が小・中学生を対象として開発した方法に基づいている。

## 3. 本研究の目的

筆者(大学教員)は，小・中学校の教員協力を得て教育実践研究を行い，俳句の魅力が季語への深い理解によってもたらされ，俳句が人と人とをつなぐコミュニケーションメディアとして機能することを実証してきた。たとえば，皆川・大黒(2004)は，小学校第 6 学年国語科において，単元名を「俳句で語ろう」とし，俳句の創作と読みの語り合いを含む 4 時間計画の授業を実施した。また，皆川・正岡(2008)は，小学第 5 学年の「総合的な学習の時間」において，単元名を「心と心をつなごう」とし，俳句を題材として創作や鑑賞，さらにはディベートを行う 4 時間計画の授業を実施した。これらの授業はともに，子どもたちが自らの思いを込めた俳句を創作し，その思いを友達にうまく伝え，仲間の俳句のよさを感じ取ることができることを実証した。いずれも，俳句の創作と読みを含む活動が創作力や読解力だけではなく，コミュニケーション力や共感性の向上をもたらす可能性を示すものである。さらに，皆川・横山(2013)は，小学校第 5 学年国語科において，季節のことば集め，俳句の創作，俳句の読み合いと感想文の記述という 3 時間計画の授業を実施し，児童が俳句に対する楽しさや達成感を感じる要素として，季語を新しく知ることができること，季語に自身の気持ちを込めて表現できること，仲間と作品を読み合うことで仲間の考えや個性を知ることができ，自身の気持ちや考えを伝えることができることなどがあることを見いだした。

皆川(2017)は，「俳句には，感じる喜び，知る喜び，そして，考える喜びという 3 つの喜びがある。その背景には人との触れ合いがあり，語り合うことで，一つ一つが深まる。感じる，知る，考えるは，人間の認知過程そのものであり，人間は触れあうことと語り合うことに支えられている。」と述べ，同人誌に所属する中堅作家，俳句初心者の大学院生，および小学校高学年の児童の創作俳句に対する質的な分析を行い，その結果を総合的に考察し，俳句における 3 つの喜び論の妥当性を検証した。自ら考え，対話しながら，新たな解を生み出し，学習場面を離れても利用できることを目指す「21 世紀の新しい学び」との関係を論証した。

本教育プログラムは，これらの教育実践研究と理論を基盤として構成・実施されてきた。自ら目標を定めて仲間と協力しながら歩き遍路を行う。その体験をもとに俳句を創作して，自らの体験を省察する。思いのままに創作した作品を仲間と鑑賞し合い，意見交換をおこなう。こうした営みは，まさにアクティブ・ラーニング(溝上，2014)であり，学生を主体的・対話的で，深い学びに導く可能性がある。本研究では，歩き遍路体験を印象づけ，省察する方法として俳句の創作を取り入れた教育プログラムの効果を質問紙法によって検証する。

## 4. 方法

(1) 研究協力者

2014 年度に N 大学学部授業「阿波学(地域文化研究)」を受講した学部生計 78 名のうち，68 名(男子 40 名，女子 32 名)が 2 泊 3 日の歩き遍路の体験をもとにした俳句を 3 句ずつ提出し，研究協力者となった。

(2) 創作俳句・分析対象

研究協力者 68 名で計 204 句が提出された。このうち，季語のない作品，季語はあるが当季(秋または夏)ではない作品，季語を羅列した作品，語呂合わせに終始している作品，および授業中に紹介した例句(過年度の学生の俳句)と酷似している作品を除く 190 句を本研究の分析対象とした。

(3) 歩き遍路に関する質問紙

下記 7 項目から成る質問紙を事前と事後に実施，0(まったくあてはまらない)から 4(とてもよくあてはまる)までの 5 段階評定を求めた。質問項目は，下記の通りであった。

(事前)

①四季折々の草花や鳥など「自然」の風物と出会いをたいせつにしたい。

②寺院の歴史や路傍の道標など地域の「文化」について学んでみたい。

③地域の人々の生活など「人間」の営みに目を向けてみようと思う。

④天候や気温，道の状態などに合わせて，歩き方を工夫してみようと思う。

⑤同じ班の人と励まし合ったり助け合ったりしようと思う。

⑥歩き遍路をしているのは自分たちだけではないと考え，周囲に配慮しながら過ごそうと思う。

⑦自分を見つめ直すよい機会にしたいと考えている。

(事後)

①四季折々の草花や鳥など「自然」の風物との出会いを楽しんだ。

②寺院の建造物，石碑，道標などを見て，地域の

「文化」について学んだ。
③地域の人々の生活や遍路道を守る努力など「人間」の営みに目を向けた。
④天候や気温，道の状態，自分の体調など場や状況に合わせて，歩き方を工夫した。
⑤同じ班の人たちと，励まし合ったり助け合ったりした。
⑥歩き遍路をしているのは自分たちだけではないと考え，周囲に配慮しながら過ごした。
⑦自分を見つめ直すよい機会となった。

(4) 倫理的配慮

質問紙には「この用紙に記入された内容は統計的に処理されます。また，個人の情報が外部にもれることは一切ありません。」と明記し，口頭でも説明した。

## 5. 結果および考察

創作俳句に用いられた季語は，時候，天文，地理，生活，行事，動物，植物の 7 カテゴリに分類された。各カテゴリの代表的な季語を下記に示す。

**時候** 残暑，爽やか，秋うらら，冷やか，秋の朝，秋の昼，秋の暮，秋の夜，夜長
**天文** 秋晴，秋の空，天高し，秋の風，鰯雲，秋の雨，秋雨，霧，月，天の川，流れ星，星月夜
**地理** 秋の山，秋の野，花野，秋の田，秋の水，水澄む，秋の川，水の秋
**生活** 菊膾，とろろ汁，干柿，新米，枝豆，秋の灯，秋の宿，案山子，秋思
**行事** 秋遍路，秋祭
**動物** 渡り鳥，鳥渡る，鵙，雁，初鴨，稲雀，赤蜻蛉，虫，虫の声，蟋蟀，鈴虫，松虫，ばった，蟷螂
**植物** 木犀，コスモス(秋桜)，鳳仙花，野菊，稲の花，彼岸花，桔梗，露草，秋草，芒，木の実，団栗，梨，柿，酸橘，柚子，さつまいも，里芋，稲穂

季語としてもっとも多く用いられたのは，「秋遍路」であり，41 句において，この季語が用いられていた。この語はこの授業の内容(受講生の体験)をもっとも端的に表す季語であることから，自らの体験を俳句にしようとする意欲が感じられ，受講生にとってこの体験がいかに印象深いものであったが読み取れる。

次に多く用いられたのは，「彼岸花」であり，34 句で用いられていた。歩き遍路の途上には，実際に多くの彼岸花が咲き乱れ，励まされたり，癒されたり，目に鮮やかであったりしたことを実感で詠んだ句がみられた。

「遍路道」という語も多用され，40 句で用いられていた。単に「遍路」とすれば春の季語であることから春の俳句になる可能性もあったが，多くの作者が「遍路道」とは別に秋の季語を加え，巧みに秋の俳句としていた。「遍路」しか季語がなく，当季ではない作品とされた俳句は 4 句にすぎなかった。

季語を上五に置く俳句がもっとも多く，全 190 句のうち 98 句(51.6%)を占めていた。次いで，下五に季語を置く俳句が多く，74(38.9%)句であった。中七に季語を置く俳句は 18 句(9.5%)に過ぎなかった。このように，上五もしくは下五に季語を置く俳句が大半を占めたことには，本授業で導入した創作法(夏井，2000)が関係していると考えられる。季語と他の語句との組み合わせ方という観点から，俳句の心理言語学的特徴を分析しうる可能性が示唆された。

質問項目①に関わる俳句(＝「自然との交流」を主題とする俳句)がもっとも多かったが，その他の質問項目に関わる俳句も相当数創作された。それぞれ，下記を主題とする俳句群である。②「文化の探究」，③「地域住民との交流」，④「状況対応」，⑤「同行者との協力」，⑥「共感・他者理解」，⑦「自己洞察」。

事前質問紙，事後質問紙への回答者は，それぞれ 70 名，68 名であった。65 名が，両方に回答した。項目別平均評定値を表 1 に示す。

歩き遍路に関する質問紙は，7 項中 5 項目において，事前よりも事後の平均評定値が上昇していた。「同行者との協力」の評定値は変わらず，「共感・他者理解」については，評定値がやや低下した。

これらの変化について考察するために，平均評定値の検定をおこない，その結果を表 2 に示す。

「文化の探究」と「地域住民との交流」では，統計学上の有意差が認められた(5%水準)。「自然との交流」と「自己洞察」については，差の傾向が認められた(10%水準)。

創作俳句との関係をみると，各項目の評点が相対的に高く，また事前から事後への評点の上昇率が高い研究協力者ほど，その項目に関わる俳句を創作する傾向にあるという関係性が認められた。これらの結果は，本授業における歩き遍路体験が「自然や文化に感銘し，自己を見つめ，他者を思いやる」機会となり，学びの質を高めたことを明示している。とりわけ，体験に伴う感動を俳句によって集約して表現するという教育活動によるところが大きいと考えられる。一方，歩き遍路をしているのは自分たちだけではないと考え，周囲に配慮しながら過ごす「共感・他者理解」の評定値がやや低下したことは反省

表 1 各質問項目の平均評定値と標準偏差

| 主題 | 事前質問紙 | | 事後質問紙 | |
|---|---|---|---|---|
| | 平均 | 標準偏差 | 平均 | 標準偏差 |
| 自然との交流 | 3.1 | 0.89 | 3.3 | 0.74 |
| 文化の探究 | 2.6 | 1.07 | 3.0 | 0.83 |
| 地域住民との交流 | 2.8 | 0.84 | 3.1 | 0.90 |
| 状況対応 | 2.7 | 0.89 | 2.9 | 1.06 |
| 同行者との協力 | 3.4 | 0.69 | 3.4 | 0.85 |
| 共感・他者理解 | 3.3 | 0.79 | 3.0 | 0.82 |
| 自己洞察 | 2.7 | 1.05 | 3.0 | 0.98 |

表 2 各質問項目の平均評定値の差の検定

| 主題 | t 値 | 自由度 | 有意確率 |
|---|---|---|---|
| 自然との交流 | 1.723 | 64 | $p<0.10$ |
| 文化の探究 | 2.320 | 64 | $p<0.05$ |
| 地域住民との交流 | 2.750 | 64 | $p<0.05$ |
| 状況対応 | 1.489 | 64 | n.s. |
| 同行者との協力 | 0.880 | 64 | n.s. |
| 共感・他者理解 | 1.984 | 64 | $p<0.10$ |
| 自己洞察 | 1.690 | 64 | $p<0.10$ |

材料となる。

## 6. まとめと展望

歩き遍路を体験した学生は，自らの感動を俳句で表現した。体験者は，事前授業時と，歩き遍路体験後の 2 回，歩き遍路をとおした学びに関する 7 項目から成る 5 段階評定の質問紙に回答した。本研究では，歩き遍路を体験した学生による創作俳句が季語を中心にどのように構成されているかを分析することを試みた。その結果，歩き遍路を体験することに加え，その感動を俳句によって表現するという課題にとり組むことにより，自然との交流，文化の探究，地域住民との交流，状況対応，同行者との協力，自己洞察といった態度や傾向が高まるようすがうかがわれ，歩き遍路という体験を俳句という表現形式によって印象づけるという取り組みによって，学びの質が深まることが示唆された。一方，共感・他者理解の側面は，必ずしも向上せず，課題を残していることも確認された。

また，本研究では 2014 年度のみのデータをとりあげたが，単年度の結果だけで結論を出すことは早計であろう。統計処理の方法が限られていたことにも問題がある。たとえば，季語と他の語句との組み合わせ方という観点から，俳句の心理言語学的特徴を分析することも有用であると考えられる。統計処理の方法を拡充し，複数年度の結果を合わせて分析することで，より多くの示唆が得られるであろう。

さまざまな観点と方法により，教育者としての省察を繰り返し，よりよい授業の構築に努めていきたいと考えている。

## 引用文献


皆川直凡(2005) 俳句理解の心理学，北大路書房.

皆川直凡(2011) 心理学からみた遍路体験，その人間形成的意義－学生による創作俳句の内省・説明文と鑑賞文の分析から－，鳴門教育大学研究紀要，教育科学編，第 26 巻，pp. 35-42.

皆川直凡(2017) 短詩型「俳句」の創作・鑑賞と 21 世紀の学びとの親和性，鳴門教育大学情報教育ジャーナル，第 14 号，pp. 21-27.

皆川直凡・大黒伸介(2004) 俳句を素材とする協同的学習の展開－知性と感性の育成を目指して－，鳴門教育大学学校教育実践センター紀要，第 18 巻，pp. 103-112.

皆川直凡・正岡繁豊(2008) 俳句を素材とする協同的活動の試みとその評価－話し合いを円滑に進める要因の分析－，日本教育心理学会第 50 回大会発表論文集，p. 185.

皆川直凡・佐々木智美(2014)．歩き遍路体験に伴う感動が人間的成長に及ぼす影響－学生による創作俳句 600 句に詠み込まれた情景と心情の分析から－，鳴門教育大学研究紀要，教育科学編，第 29 巻，pp. 1-14.

皆川直凡・横山武文(2013) 子どもの発達の最近接領域を考慮した学習指導の在り方の検討－俳句をとおした感動・共感体験による季語への関心・知識の深まり－，鳴門教育大学授業実践研究，第 12 巻，pp. 19-27.

溝上慎一(2014) アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換，東信堂，pp. 3-23.

夏井いつき(2000) 子供たちはいかにして俳句と出会ったか－夏井いつきの俳句の授業，創風社出版.

Tulving，E.，太田信夫(訳)(1985) タルヴィングの記憶理論－エピソード記憶の要素，教育出版.